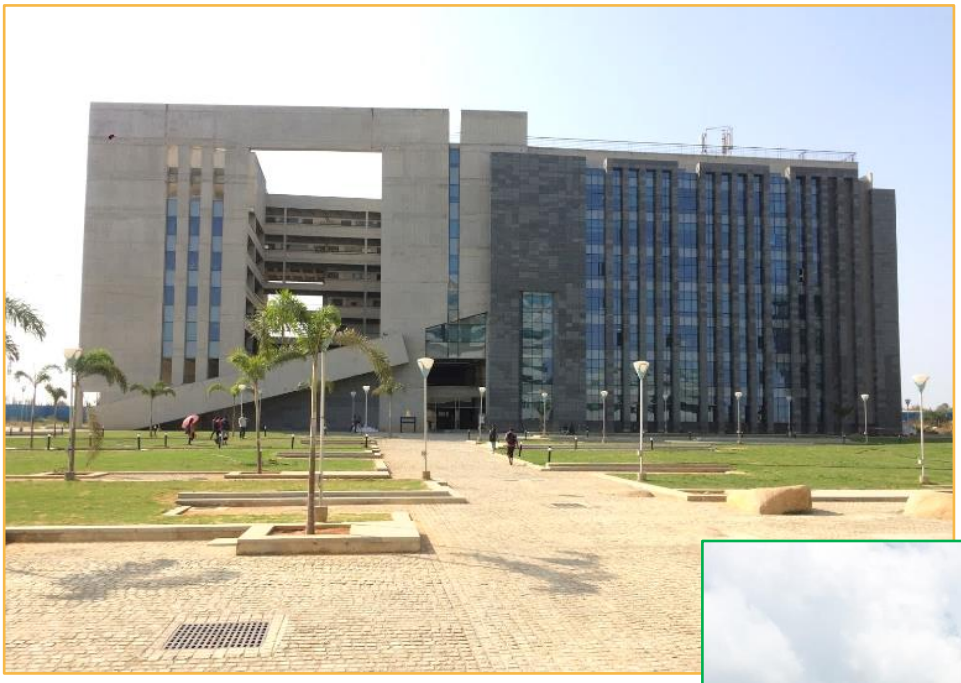
2021 年 12 月号　　題字　一萬田 尚登 第 5 代日印協会会長

月刊インド

Monthly Journal of the Japan-India Association

公益財団法人 日 印 協 会（日印間の政治・経済・文化・人的交流に貢献して 118 年）



インド工科大学ハイデラバード校（IIT-H）

上：校舎
（ウィキペディアより）

右：紅白の横ストライプが象徴的な学生寮
（写真撮影：日印協会理事　山田真美）

目次

1. インドの教育と日印連携―大学院生マヘシュ・ジャッカプさん
（JICA フレンドシップ・プロジェクト奨学金留学生）のモデル事例 ····· P. 3
2. 新型コロナがプッシュしたインドのデジタル化 ····· P. 6
3. インドニュース（2021 年 11 月） ····· P. 9
4. 新刊書紹介 ····· P. 15
5. イベント紹介とお知らせ ····· P 15
6. 掲示板 ····· P. 18

広告削除後、目次とページを合わせるために空白ページをいれております。

1. インドの教育と日印連携
—大学院生マヘシュ・ジャッカプさん（JICA フレンドシップ・プロジェクト奨学金留学生）のモデル事例

Education in India and Japan-India Collaboration: The Model Case of Mahesh JAKKAPU, A Graduate Student of JICA Friendship Project Scholarship

公益財団法人日印協会理事
山田真美

縁あって 2015 年からインド工科大学ハイデラバード校（以下 IIT-H）の客員准教授を務めています。2008 年設立の IIT-H は、インド全土 23 か所に設置されたインド工科大学（以下 IIT）の中でもとりわけ日本との縁が深く、日本の産官学が連携して「オール・ジャパン体制」で財政・技術支援に当たっているキャンパス。

筆者はここでバリバリ理系の学生達を相手に、日本史と日本文化全般に関するこれまたバリバリ文系の集中講義を行なっているのですが、その目的は未来のインドを背負って立つ若者達に日本のよさを伝え、一人でも多くの日本ファンを育てること。

授業を楽しくするために、ある時は仏教と共に日本に渡ってきたインドの神々（弁才天や大黒天など）の話を盛り込んで比較神話論を展開させ、またある時は日本のアニメやマンガの話題をふんだんに取り入れるなどして、彼らが「日本に留学（就職）しよう！」と決意するきっかけの一つとなるような授業をめざし、趣向を凝らしています。

筆者（左から 3 人目）を囲んで談笑する IIT-H の学生たち。右端がマヘシュさん。左端の 2 人はマヘシュさんの同期で、2019 年からリサーチエンジニアとしてスズキ本社に勤務するプラシューシャさんとヴィプルさん。2017 年撮影（Photo by Maniyarasan）

その結果、第一回目（2015 年）の開講時にはわずか 6 名だった履修者が、その後口コミで急増し、2021 年（コロナ禍のためオンラインで開催）には過去最多の 209 名に達したのはありがたいことでした。

本稿では、IIT-H での授業を通して筆者が出会った数百名に及ぶ学生のうち、現在博士号を目指して日本の大学院で研鑽を積んでいるマヘシュ・ジャッカプさんに焦点を当て、彼が難関の IIT-H に合格するまでの道のりと、在学中の様子、さらには日本へ留学するまでの経緯や現在の様子などを通して、彼を生み出したインドという国の教育事情と、教育における日印連携の成果の一端をご紹介したいと思います。

マヘシュさんは 1996 年、南インドのアーンドラ・プラデーシュ州の片田舎で、一家の長男として生まれました。唯一の働き手である父と、専業主婦の母、二歳下の妹から成る四人家族。経済的には豊かではありませんでしたが、幼少期のマヘシュさんの心をとびきり豊かにしてくれるものがあったといいます。それは、テレビを点けると流れてくる日本のアニメでした。当時のことをマヘシュさんは次のように振り返ります。

「生まれて初めて日本のアニメを観たのは、たしか 8 歳か 9 歳の頃でした。なかでも一番のめり込んだのは、忍者同士のバトルを描いた『NARUTO』という作品です。英語やヒンディー語ではなく、私の母語であるテルグ語に吹き替えられたバージョンでした。主人公のうずまきナルトはラーメンが大好きという設定に、幼い私がどれだけ胸をわくわくさせたか知れません。大きくなったら日本へ行って、ラーメンというものを食べてみたい！そう思ったのが、私が日本に憧れた最初のきっかけでした」

こうして日本への想いを募らせるようになったマヘシュさんですが、そこから実際に来日するまでの道のりは平坦なものではありませんでした。何故なら、彼の生まれた場所は典型的な農村部。そして、インドをご存じの方ならおわかりのように、この国の都市部と農村部の間には、経済、産業、インフラ、教育、文化など、ありとあらゆる点で絶望的なまでの格差が横たわっているからです。

例えば 2018 年のインド政府データ（注 1）によれば、7 歳以上のインド人の識字率が都市部では 87.7%なのに対し、農村部では73.5%。15歳以上で中等教育以上を修了した人の割合は、都市部で57.5%、農村部では30.6%。15 歳以上で大学以上の教育を修了した人の割合に至っては、都市部の 21.7%に対して、農村部ではわずか 5.7%に過ぎませんでした。

さらに世帯ごとのパソコン保有率を見ると、都市部で 23.4%、農村部で 4.4%。インターネットを利用している世帯の割合は、都市部では 42.0%、農村部では 14.9%。

これとは別に、英語を話せる人の割合（2019 年現在）を、都市部で 12%、農村部で 3%とするデータもあります（注 2）。

これらの数字を概観しただけでも、インドの農村部で生まれ、そこから自力で身を起こすことがいかに大変か、想像に難くありません。

マヘシュさんの身の上に天啓とも呼ぶべき大きなチャンスが訪れたのは、小学 5 年生のある日のことでした。担任の女の先生の、

「JNV の入学試験を受けてごらんなさい」

という鶴の一声。ここからマヘシュさんの人生は大きく変わっていきます。

JNV とはジャワハル・ナヴォダヤ・ヴィダヤラヤの略で、主にインドの農村部で「発見」された特別に優秀な子ども達のために設けられた全寮制のハイスクールのこと。6 年生から 12 年生までのカリキュラムを学ぶことができます。1986 年にラジーヴ・ガンディー政権下で最初のキャンパスが開校され、以来その数を増やし続けて、2020 年 3 月現在、インド各地に 661 校が展開しています（注 3）。

特筆すべきは、一旦 JNV に入学を許可されれば、そのあとの学費、寮費、食費、教材費などすべての経費が完全に無料だということ。そのため、当然のことながら入試倍率は例年非常に高く、例えば 2021 年度の場合は約 140 万人の受験者に対し合格者は 47,320 人で、倍率はほぼ 30 倍に達しました（注 4）。

この狭き門に挑戦し、見事合格したマヘシュさん。当時を次のように振り返ります。

「いざ JNV に入ってみると、クラスは優秀な子ども達であふれていました。その中に一人、特に頭がよく、英語の得意な男子生徒がいました。その当時、私はまだ少しも英語を知りませんでしたから、彼の英語力には衝撃を受けましたよ。幸い私は彼よりも数学ができたので、私が彼の数学学習を手助けし、その代わりに彼が私に英語を教えてくれることになりました。現在の私は英語の小説を読むことが趣味ですが、それはひとえに彼のお蔭と言えるでしょう。ちなみに彼は今、医学の道を突き進んでいます」

マヘシュさんの口から英語の話が出たところで、インドの高等教育における英語の重要性について少し考えてみたいと思います。

インドの大学の講義は英語で行われることが多く、IIT に限って言えば講義はすべて英語で行なわれます。しかし――ここが少しトリッキーなところなのですが――IIT への入試自体は数学・物理・化学の 3 教科だけで、英語力を問う試験はありません（ついでに言えば社会科の試験もないため、歴史や地理の知識がゼロでも IIT への合格は可能です）。また、入試の問題用紙に用いられる言語は英語またはヒンディー語からの二択のため、英語の苦手な学生がヒンディー語の問題用紙で受験し、IIT に合格することも可能です。

しかし英語の苦手な学生が IIT に入学した場合、その先はどうなるでしょう。初日から英語だけで行なわれる授業。しかも筆者の知る限り、インド人の教授たちはトンデモなく早口です。授業に付いて行けず、早晩ドロップアウトしてしまう危険性が大ではないでしょうか。事実、それが理由で寮の自室に引きこもるようになり、やがて退学、最悪の場合は自死に至った学生の話を、筆者はインド各地の IIT 関係者から幾度となく耳にしました。

大学で生き残るためには、即戦力として使えるだけの英語力を遅くとも高校卒業までにはマスターすることが絶対要件である。これは鉄則と言ってよいでしょう。6 年生で英語の得意なクラスメートと出会ったマヘシュさんは、そのことを痛感したのではないでしょうか。

10 年生になったマヘシュさんは、大学へ進んで物理学を専攻することを決意。さらに 11 年・12 年次は IIT 受験に特化したコーチングスクール（学習塾）に通い、まさに寝る間も惜しんで過酷な受験勉強に耐えました。両親がコーチングスクールの学費を捻出できなかったため、祖父母が肩代わりしてくれました。彼の受験は彼個人のものではなく、一族のプロジェクトでもあったわけです。

IIT は入試倍率が例年 100 倍以上に達する超難関。しかし猛勉強の甲斐あって、マヘシュさんはその試験に見事一発で合格。故郷の村にとっては初めての IIT 合格者だったため、それこそ村を挙げての大騒ぎになったそう

です。両親は内祝いの菓子をどっさり用意し、誇らしげに村の人々に振る舞って歩きました。

IIT-H に入学した後もますます熱心に学業に打ち込み続けたマヘシュさんは、1 年目に宇宙のすべての物質の基本的な基盤に興味を持つようになりました。2 年目には素粒子物理学の選択科目を履修し、自分が本当に取り組みたいテーマがはっきりと見えてきました。

筆者の第一回講義が開講されたのは、ちょうどその頃です。大学側がコースの発表をしたのが学期末ギリギリだったため、学生達に情報が行き渡らず、履修登録者はわずか 6 名。そのため毎回の授業が実にインタラクティブ（双方向型）で白熱したものになったのは、怪我の功名と言えるかも知れません。6 名はそれぞれ大の日本ファンで、将来は何らかの形で日本へ行きたいという夢を持っていました。マヘシュさんは無口でしたが、「絶対に日本へ行く！」という決意は 6 名のうちで圧倒的に一番強いように見受けました。

その後、3 年生の時に長年の夢が叶い、初来日。茨城県にある高エネルギー加速器研究機構（KEK）に、2 か月間インターンとして滞在しました。この時、日本に着いたマヘシュさんが最初にとった食事は、言うまでもなくラーメンです。

「想像していたものとは少なからず味が違いました」

と戸惑った様子でしたが、何はともあれ 8 歳の時に描いた夢を自分の力で叶えることができたわけです。

高エネルギー加速器研究機構（KEK）での
マヘシュさん。2021 年撮影。

その後も休まず勉強を続け、KEK の素粒子・原子核物理学部門に所属する総合研究大学院大学（略称は総研大）を受験し、合格。IIT-H 卒業と同時に来日し、2021 年現在は JICA フレンドシップ・プロジェクト（注 5）の奨学金を得て、同大学院のニュートリノ物理学研究グループで博士号を目指し日々研究に励んでいます。

不運にも新型コロナウイルス感染症のパンデミックが発生し、自由に行動できない日々が長く続きましたが、そのような状況下でもマイペースを崩さず日本での生活を全力で生きているマヘシュさん。現在の彼の目に日本がどのように映っているのか気になり、「実際に住んでみて感じる日本の良いところベスト 5 を聞かせてください」と尋ねたところ、

「第一に、空気がきれいなこと。現在住んでいる東海村が特にそうなのかも知れませんが、私は人生の大半をインドのスモッグや風塵のアレルギーに悩まされ続けてきました。日本の空気のきれいさは快適の一語に尽きます。第二に、大好きな秋葉原があること。第三に、人々が親切で正直なこと。第四に、公共交通機関の驚くべき時間正確さ。第五に、 24 時間営業のコンビニ。これは深夜にお腹が空いた時の救世主です」

という即答が返ってきました。

良いところだけ聞くのはフェアではないと思い、「では日本の良くないところワースト 5 は？」と重ねて質問すると、マヘシュさんは困惑したようにしばらく考えてから、

「5 つも見つかりません。しいて言えば、日本では友達をつくるのが難しいこと。日本の皆さんは、内向的な私よりもさらに内向的ですから。あとは、スパイシーな食べ物が恋しいことと、メールで十分なのにすべて紙の書類が必要な文化でしょうか」

と正直に答えてくれました。その様子から、彼がますます日本での生活を満喫している現状を見て取れたことは嬉しい限りです。

以上、初めて日本に憧れた 8 歳から、博士研究に没頭する 25 歳までのマヘシュさんの、まったく「ブレ」のない 17 年間を駆け足でご紹介させていただきました。

彼の類稀なる才能も、少し昔のインドなら発見されることなく農村のどこかに埋もれてしまっていたことでしょう。しかし現在のインドでは、そうした才能が積極的に生かされるシステムが果敢に構築されつつあり、しかも今回の場合は日本の協力によって大きく花咲こうとしています。「教育分野での連携」。筆者はそこにこそ日印友好交流の明るい未来と、これからの日本が国際社会で生き残ってゆくために進むべき持続可能な理想の道があるように思えてならないのです。

注１： Key Indicators of Household Social Consumption on Education In India NSS 75TH Round (JULY 2017- JUNE 2018), Press Information Bureau, Ministry of Statistics & Programme Implementation
注２：
https://www.financialexpress.com/opinion/english-speaking-correlated-to-caste-class-and-education/1580684/
注３： navodaya.gov.in/nvs/en/About-Us/Establishment-of-JNVs/
注４： https://www.vidyanidhi.org.in/exam/results/navodaya-class-6-result-jnvst-selection-list/#r
注５： The Project for Future Researchers at IIT-H to Enhance Network Development with Scholarship of Japan

山田真美（やまだ・まみ）：
作家で博士（人文科学）。2001 年から日印芸術研究所（インド政府認可法人）言語センター長、2010 年から日印協会理事、2015 年からはインド工科大学ハイデラバード校教養学部客員准教授を務めている。公式ウェブサイト www.yamadamami.com

2. 新型コロナがプッシュしたインドのデジタル化
Digital Culture pushed by Covid 19, or Digital Transformation pushed by Covid 19

日本航空株式会社ベンガルール営業所
高野憲一　個人会員

3 度目のインド駐在も早いもので 2 年が経過した。大半を新型コロナウイルスと共に過ごしたと言っても過言ではない。インドの第二波のインパクトは日本においては今でも大きいようで、9 月から 10 月にかけて日本に一時帰国をした際、「インドは大丈夫ですか？」と多くの人から声をかけられた。日本は第五波の影響で首都圏を中心に緊急事態宣言が出ているのに、「今日本に戻って大丈夫なのか」と多くのインド人から声をかけられたことなど考えもしないであろう。残念ながら第二波が終息してからのインドの様子は日本でほとんど報じられておらず、未だインドはコロナウイルスの感染がおさまっていないと思われているようである。ただそれだけでなく、残念ながら日本人の持つインドに対する負のイメージが昔と変わっていない事が大きいように思う。

5 月に 1 日最大 41 万人超えの新規感染者数を記録したインドであるが、執筆当時は 1 万人前後で推移している。インド政府はすでに経済再生に舵を切っており、日本はもとより外国からのビジネス渡航者の入国を認めている。インド渡航前に取得した PCR 検査の陰性証明書があれば、14 日間の自己経過観察、という形で隔離なしに受け入れている。またワクチン接種者を対象に、欧米や中東などの国と、相互に隔離なしにて往来できるルール作りが進んでいる。

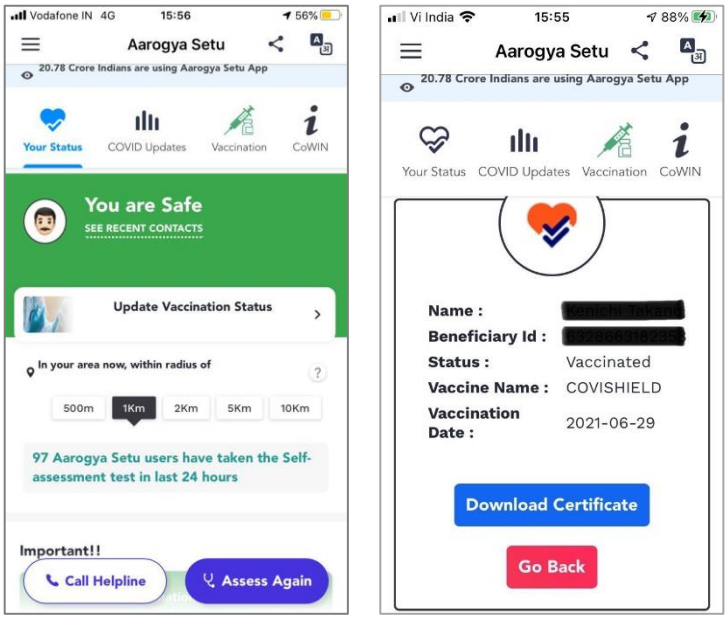
初めてインドに赴任したのは 2009 年、当時は、いや数年前までは日本に一時帰国する度に日本は何もかもが便利で快適だと感じていた。しかしながらここ最近、日本は大丈夫かな？と思う事が多くなった。特にデジタル分野においての遅れを感じる。記憶にある方も多いと思うが、2016 年 11 月に突然実施された高額紙幣廃止をきっかけに、インドでは電子マネー化が一気に進んでおり、今では現金を使う機会が少なくなった。インドの今、特にデジタル分野における今の状況を、いくつか取り上げてみたい。

1.　Aarogya Setu（COCOA のようなアプリ）

日本における COCOA のようなアプリである Aarogya Setu はインド政府が開発、インドが最初のロックダウンに入った翌月、2020 年 4 月にはリリースされ、5 月から本格導入が始まっている。空港やショッピングモールなどに立ち入る際には提示が義務付けられ、自身が感染していないことを証明できなければ入場できなくなった。

当初は①自分がコロナに感染していない事を証明する手段、②自身の周りにどれだけの感染者や自宅において隔離している人がいるかを確認する手段、に過ぎなかったが、アプリの機能は日々進化し続け、今ではワクチン接種の予約はもちろんのこと、ワクチン接種証明書の提示も可能になっている。そのため日本のように紙のワクチン接種証明書を携行する必要はない。

さらに言えば、日本では日頃インターネットを利用していない高齢者がオンラインによるワクチン接種の予約ができないというケースが相次いでいたが、インドではそれを防ぐ目的があるのか、一度に複数名のワクチン接種の予約が可能になっている。高齢者に代わって家族などが予約できる仕組みになっているのだ。日本では不便だと感じている事が、インドではかなりのスピードで解決、改善されていることを、このアプリの進化を通じて実感した。参考までにインドにおけるワクチン接種は、日本より早い 2021 年 1 月より開始されている。



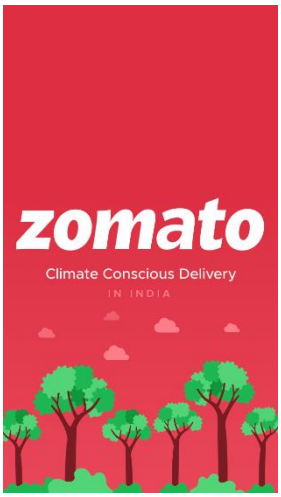
Aarogya Setu の非感染者証明（左）と、ワクチン接種証明書（右）

2.　宅配アプリ

インドでは数年前から、Zomato や Swiggy などが提供している宅配サービスが広く普及している。宅配サービスのみならず、レストランの予約もこのアプリで可能である。以前はよくあった、お店に電話が通じない、通じても話がうまく進まない、予約したはずなのに行ってみたら予約が入っていない、といったトラブルがなくなった。またレストランなどからの宅配サービスのみならず、スーパーマーケットによる食材の宅配サービスも可能となっている。加えて配送サービス専門の DUNZO などは、様々なお店から食材や生活必需品を代行して購入・配達するサービスを一気に拡大した。これらのサービスは新型コロナウイルスの拡大と共に発展したと言っても過言ではなく、ロックダウン下のインドにおいて多くの人が助けられたことであろう。

特に最初にロックダウンに入った直後は全く外出ができず、我々在留邦人のみならずインド人でさえも、食材は手に入るのか、この先どうなるのかと不安な気持ちを抱えていた。それが数日後には宅配サービスが充実し、食事にありつけないという最悪の事態には陥らなかった。ロックダウン通達後インド政府は即座に、エッセンシャルサービス、いわゆる生きていくために欠かすことのできない仕事をリスト化し、そういった仕事に就く人々は外出が許可された。エッセンシャルサービスに従事する人々の活躍無しには、インドはロックダウンを乗り切ることはできなかったであろう。時にモディ首相はエッセンシャルサービスに従事する方々を讃えていたのが印象的であった。

こういった状況の中、最も多くの人々が利用しているのが Zomato であろう。配達を希望する場所を設定すれば配達可能なレストランが表示され、メニューから注文を確定させるだけ。支払いは事前にオンラインにて完了、決済アプリやクレジットカードなどの利用が可能である。ロックダウン下で働く配達員への感謝の気持ちを込めてチップも追加で支払い可能となった。これまた以前によくあった、支払いの際にお釣りがないと言われて揉めることも、チップをよこせと言われて不快な思いをすることもなくなった。お店、配達員、注文する人それぞれが 5 点満点でお互

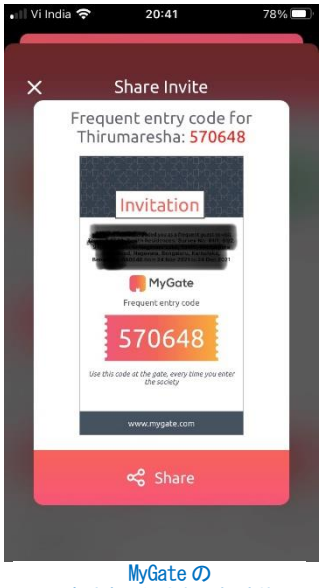


配達アプリ　Zomato

いを評価し合うシステムのため、店員や配達員の愛想がとても良くなってきている。
　このような宅配ビジネスが急速に発展している背景には、配達員の人件費が安いという点がインドにあることは言うまでもないが、インドのスピードの速さにはいつも驚かされている。

3.　マンション管理アプリ

　私が住むベンガルールにはたくさんのスタートアップが存在しており、日々新しいアプリが開発されている。その中でもとても便利だと思うアプリを紹介したい。
　MyGate という、簡単に言えばマンション管理アプリである。インドのマンションはセキュリティが厳しく住人以外の立ち入りは制限されているが、これをアプリで一元管理するものである。例えば来客があるとする。来訪者の名前、来訪日時、携帯番号を登録すると、来訪者には招待状が転送される。同時にマンションの管理事務所にはその情報が共有される。当日はマンションのゲート、建物入り口のセキュリティがその招待状を確認、来訪者はスムーズに入場できる。居住者には来訪者がマンションに入場したことが知らされるのでとても便利である。事前に登録を行っていない来訪者があった際は、セキュリティからまずはアプリを通じて情報が共有され、入場を許可するか拒否するかを選択する。アプリの通知に気づかない場合にはセキュリティから電話がかかってくる仕組みとなっている。そのため日本にいてもどんな来訪者があったかがわかり、また拒否できるのでセキュリティ面でも安心である。
　それ以外にも様々な機能がある。回覧板の機能も兼ね備えており、重要な情報は全てアプリで共有されるため掲示板の貼り紙もなくなった。以前に比べ情報の見落としがなくなったのは言うまでもない。



MyGate の
来訪者配信される招待状

　私が住むマンションでは、この機能を利用してマンション独自で大規模出張ワクチン接種が実施された。管理事務所より希望者がどれだけいるかを問うアンケートに始まり、Google スプレッドシートによる希望登録および支払い、接種時間割表の共有、当日の実施まですべてアプリだけで完結、200 人を超える接種がまったく混乱なく行われた。ワクチン接種者は誰とも会話することなく、またどこにも行く必要もなく、手間がかかることなく接種が完了した。日本では大規模接種会場で様々な障害が発生していたが、インドではマンションや企業、ビルなどが独自での接種を行っているものの大きな混乱は起こっていない。その他 PCR 検査の申し込み、電気代などの支払いもこのアプリでできる。また内線電話機能も兼ね備えており、これは携帯電話が普及していることで自宅に電話回線を引かない人が増えていることに対応したのだそうだ。この点に対する気の利かせ方も素晴らしいと思う。このような機能が日々アップデートされていき便利になっていく。
　ただ時々回覧機能を利用して面白いやり取りが交わされている。「誰か氷を分けてくれないか」、「ワインオープナーを貸してくれないか」など、いかにもインドらしいメッセージが入ってくる。こんなメッセージには誰も回答しないであろうと思いきや、1 分もしないうちに、「うちにあるから取りに来なさい」というメッセージが交わされていることには驚いた。インド人の優しさに触れ、自分はなんて器が小さいのかと恥ずかしくなった。

　以上、ごく一部ではあるもののインドの今をお伝えしてきたが、新型コロナウイルスがデジタル化をさらに加速させていることは間違いない。インド人は新型コロナウイルスの蔓延という大ピンチを、今では大きなチャンスと捉えていると感じている。
　一方でこのような急激なデジタル化の発展に伴い、一つだけ寂しく思うことがある。言った言わない、ああでもないこうでもない、とインド人相手に交渉し問題を解決する機会が減ってしまったことである。特に現在はインドのシリコンバレーと言われるベンガルールにいることで、より一層そのように感じているのかもしれない。日本人インド駐在員はこれまで、日々生じるインド人との交渉の機会を通して逞しく成長してきたように思う。皆何だかんだ文句を言いながら楽しんでいるように見えた。決まって酒の肴はこの話になる。今ではその『楽しみ』が減っていることで、駐在員の交渉力が落ち、逞しさがなくなってきているのかもしれない。ただし裏を返せば余計なことに気を取られることがなくなり、ビジネスがやりやすくなっているということでもあるので、読者の皆さまにはぜひ、古い負のイメージを新しいインドのイメージに変えて頂けたら嬉しく思う。

10 月末に約 1 ヶ月の一時帰国を終えベンガルールに戻ったが、その間ベンガルールにはすっかり活気が戻っている事に驚いた。世界一と言われている渋滞が復活してしまった事は悩ましい限りだが、第二波を乗り越え新型コロナウイルスと正面から向き合い歩みを進めるインド、この先も成長し続けることは間違いないであろう。最後に、歴史ある月刊インドに寄稿させて頂く機会を頂いた、日印協会の皆様に心から感謝申し上げたい。

活気が戻り渋滞も復活したベンガルール

高野憲一（たかの・けんいち）：
日本航空株式会社ベンガルール営業所長。過去に JTB India Pvt. Ltd.及び日本政府観光局（JNTO）デリー事務所を設立。2019 年より日本航空においてベンガルール線新規就航を担当。

3. インドニュース(2021 年 11 月)
News from India

1　内政

【冬期国会】
11 月 29 日
11 月 29 日～12 月 23 日の会期で、冬期国会が開会された。

【連邦政府】
11 月 2 日
10 月 30 日に 13 の州及び 1 つの連邦直轄領において行われた補欠選挙（下院議会 3 議席と州議会 29 議席）の開票が行われた。現地メディアによれば、コングレスがＢＪＰの選挙区を奪った州もいくつか見られるが、両勢力が混ざり合い「mixed」との評価が報じられており、「野党が勢いづいた」とまでは言えない結果であったとの分析がなされている。
11 月 6 日
現地メディアは、内閣議会委員会（CCPA）が 11 月 29 日から 12 月 23 日の会期で冬期国会を実施する旨承認したと報じた。
11 月 14 日
中央捜査局（ＣＢＩ）及び財務省監視局（Enforcement Directorate：ED）の長官の任期を 2 年から最大 5 年に延長することを認める条例が交付された。

【ＢＪＰ】
11 月 7 日
ＢＪＰ全国幹部会議（BJP national executive meeting）がハイブリッド形式で実施され、モディ首相、シャー内相、ナッダ総裁など、350 名を超える同党幹部が出席した。会議では 2022 年に控える各州議会選挙に向けた話し合いが行われ、ナッダ総裁は、「党の最盛期はまだ迎えていない」と述べ、選挙が行われる州での党組織強化を目標に掲げたほか、特に南部州への活動強化に取り組むよう述べた。

【農業法改正】
11 月 19 日
モディ首相は、農業関連法の廃止と、29 日から始まる冬期国会で廃止に向けた手続きを行う旨発表した。
11 月 20 日
統一農民戦線（ＳKM）は冬期国会で農業関連法が廃止されるまで、抗議活動を継続し、26 日の抗議運動記念日（抗議活動開始 1 年）や、29 日の冬期国会初日の国会議事堂へのトラクター行進などを行う旨発表した。（なお、トラクター行進は後日中止）
11 月 29 日
冬期国会初日に提出された農業関連法廃止法案（The Farm Laws Repeal Bill, 2021）が、審議されること無く、下院・上院双方で可決された。

【ジャンム・カシミール（ＪＫ）準州】
11 月 4 日
現地メディアは、モディ首相がＪＫ準州ラジューリ県ナウシェラ地区を訪問し、陸軍兵士と共にディワーリー祭を祝った旨報じた。

【パンジャーブ（ＰＢ）州】
11 月 1 日
アマリンダル・シン前ＰＢ州首相は、ソニア・ガンディー・コングレス総裁に離党届けを提出、自ら立ち上げた新政党、「Punjab Lok Congress（パンジャーブ民主会議派）」の党名を発表した。
11 月 8 日
現地メディアは、アシュワニ・シャルマＢＪＰ・ＰＢ支部長が、2022 年に控える州議会選挙において、ＢＪＰが同州全 117 議席全てで擁立を目指すと発言した旨報じた。
11 月 20 日
シドゥＰＢ州コングレス委員長は、カルタルプール回廊の同州とパキスタン国境地点において、パキスタン政府関係者の出迎えを受けた際、「カーン首相はたくさんの愛を注いでくれた兄の様な存在である」と発言、ＢＪＰから非難の声が上がった。

【デリー（ＤＬ）準州】
11 月 14 日
現地メディアは、ＤＬ準州政府が大気汚染による全ての教育機関の閉鎖を発表した旨報じた。15 日から 1 週間、準州内の全ての教育機関、同準州政府機関が閉鎖され、遠隔授業または在宅勤務に移行されるほか、少なくとも 17 日まで準州内の建設作業が禁止された。

【ウッタル・プラデシュ（ＵＰ）州】
11 月 6 日
現地メディアは、アディティヤナートＵＰ州首相が、2022 年同州議会選挙への州首相自身の出馬は党が決定すると述べた旨報じた。

11 月 8 日
現地メディアは、ＵＰ州ラキンプール・ケリー県で発生した事案（10 月 3 日、農業関連法反対デモ行進を行う農民らの列に同州政府関係者を乗せた車が衝突した）に対する同州警察の調査が不十分だとして、最高裁が、ＵＰ州以外の退任高等裁判所判事を監視につける必要があると述べた旨報じた。
11 月 12 日
現地メディアは、ヤーダブ社会主義党（ＳＰ）党首が同党が州政権を取った場合、カースト国勢調査の実施を約束した旨報じた。
11 月 15 日
現地メディアは、プリヤンカ・コングレスＵＰ州支部長が、同党は来年の同州議会選挙において、他の政党と協力せず、単独で戦うと述べた旨報じた。

【ウッタラカンド（ＵＫ）州】
11 月 1 日
現地メディアは、ＵＫ州政府が 10 年生から 12 年生の約 16 万人に対し、タブレットを無料で配布する予定であり、州議会選挙の日程が発表される前に配布を終える予定であると報じている。
11 月 5 日
現地メディアは、モディ首相がＵＫ州にあるヒンドゥー教聖地ケダルナート寺院を訪問した旨報じた。
11 月 12 日
現地メディアは、ＳＰ党が 2022 年に予定される同州議会選挙において、全 70 議席全てで候補者を擁立すると発表した旨報じた。

2　経済

11 月 30 日
インド統計・計画実施省は、2021 年度第 2 四半期（7～9 月）の実質ＧＤＰ成長率（2011 年基準）推計値を前年同期比 8．4%と発表した。新型コロナによる厳格なロックダウンで経済活動が停滞し、マイナス成長を余儀なくされた前年同期とは対照的に、プラス成長に転じた。

3　外交

（印パ関係）
11 月 17 日
現地メディアは、新型コロナウイルス感染症の為に閉鎖されていた、印パ間のカルタールプル・サーヒブ回廊（パキスタンに位置するシーク教寺院とインド・パンジャブ州アムリトサル市近郊のシーク教寺院とを結ぶ、両国のシーク教徒に開かれた、ビザ無しの宗教回廊）が再開された旨報じた。

（印米関係）
11 月 13 日
印外務省は、モディ首相が、ジョン・コーニン上院議員ら米国議会代表団と面会した旨発表した。面会では、南アジアやインド太平洋の関連を含め、相互の関心事項である地域情勢について議論が行われた。

（印豪関係）
11 月 18 日
印外務省は、豪州戦略政策研究所（ＡＳＰＩ）が 17 日～19 日に開催したシドニー対話において、モディ首相がオンラインで基調演説を行った旨発表した。「インドの技術開発と革新」というテーマの下、モディ首相は、インド太平洋地域及びデジタル化した世界におけるインドの中心的な役割を認識している旨述べた。

（印露関係）
11 月 26 日
印外務省は、第一回印露外務・防衛閣僚会議（「2＋2」）が 12 月 6 日にニューデリーで開催される旨、また、プーチン大統領が 12 月 6 日にデリーを訪問し、モディ首相と共に第 21 回印露年次会合を開催する旨発表した。前回の印露年次会合は、2019 年にモディ首相がウラジオストクを訪問し開催された。両首脳による対面での会談は、2019 年 11 月以来となる。

（印中関係）
11 月 7 日
現地メディアは、ジャンム・カシミール州ラダックやアルナチャル・プラデシュ州のＬＡＣ(実効支配戦)、沿いにおける道路計画を加速するために、道路建設を行う特別な建設部隊を展開させることを決定した旨報じた。
11 月 13 日
現地メディアは、ラワット印国防参謀長が 11 日に実施されたシンポジウムで、インドにとって第一の敵（enemy number 1）は中国かと問われ、「疑いなくそうだ（no doubt）」と答え、パキスタンよりも「北部国境の脅威はより大きい」と述べた旨報じた。
11 月 18 日
インド外務省は、第 23 回印中国境問題に関する協議及び調整のためのワーキングメカニズム会合（WMＣＣ）が同日開催された旨のプレス・リリースを発表した。
11 月 19 日
現地メディアは、中国がアルナチャル・プラデシュ州の国境沿いにおいて、2 つ目となる村落の建設を行っている旨報じた。
11 月 29 日
現地メディアは、最近印中間で実施された協議において、インドが中国軍の東部ラダックにおけるインフラ増強に対して懸念を表明した旨報じた。インドは、中国による道路の新設・拡張、新たな居住区、村落及び空港の建設のほか、ミサイル連隊を含む重火器の配備を懸念すべき理由として挙げている。

（印・ベトナム関係）
11 月 12 日
印外務省は、オンラインで印・ベトナム政務協議及び戦略対話が行われた旨発表した。印外務省からは、ダス東担当次官が出席し、印越間における 2020 年 12 月のテレビ電話首脳会談以来の進展及び両国首脳が署名した「平和・繁栄・人々に対する共同ビジョン」の 2021 年から 2023 年アクションプランについてレビューした。

（印・アフガニスタン関係）
11 月 10 日
印外務省は、第 3 回「アフガニスタンに関する地域安全保障対話」がニューデリーで参加者を拡大し開催された旨発表した。インド、イラン、カザフスタン、キルギス、ロシア、タジキスタン、トルクメニスタン、ウズベキスタンの国家安全保障担当補佐官および安全保障会議事務局長が出席し、「アフガニスタンに関するデリー宣言」を発表した。

（印ＥＵ関係）
11 月 16 日
印外務省は、シュリングラ外務次官がサニーノ欧州対外活動庁（ＥＥＡＳ）事務総長と電話会談を行った旨発表した。デリー地域安全保障対話を含むアフガニスタン情勢、ミャンマー情勢やベラルーシ・ポーランド国境情勢について議論し、今後継続的に協議を行うことで合意した。

（湾岸協力理事会）
11 月 10 日
印外務省は、ジャイシャンカル外相が、10 日～11 日まで訪印した湾岸協力理事会（ＧＣＣ）ナーイフ・ファラー・アル・ハジュラフ事務局長と会談した旨発表した。両者は、印ＧＣＣ間における近年より強化された友好関係を振り返り、更なる協力関係の深化について議論を行った。

（ＣＯＰ26 世界リーダーズ・サミット）
11 月 10 日
現地メディアは、米国が 101 カ国目の加盟国として「太陽に関する国際的な同盟（ＩＳＡ）」に加盟し、ジョン・ケリー米国気候問題大統領特使がブペンドラ・ヤーダブ環境大臣に加入文書を提出した旨報じた。ＩＳＡは 2015 年のＣＯＰ21 開催期間中に、国際社会における太陽エネルギーの飛躍的な普及・拡大を目的とし、インドがフランスと共に立ち上げたイニシアティブで、事務局はニューデリーに所在している。

（環インド洋連合（ＩＯＲＡ））
11 月 17 日
印外務省は、ラージクマール・ランジャン・シン外務副大臣が、第 21 回環インド洋連合（ＩＯＲＡ）閣僚会合にオンラインで出席した旨発表した。シン外務副大臣は、環インド洋及び更に広いインド太平洋における平和、安全、繁栄を促進するためにＩＯＲＡ強化に向けたインドの強固なコミットメントを再確認し、災害リスク管理の分野におけるインドの貢献を強調した他、インドの新型コロナ対応の経験について説明し、インドの経験と資源を共有する用意があることを強調した。

（上海協力機構（ＳＣＯ））
11 月 25 日
印外務省は、ジャイシャンカル外相がカザフスタンの主催するＳＣＯ各国政府代表会合に出席した旨発表した。本会議は毎年開催され、貿易及び経済に関する議題の他、年間予算の承認を行うものとされている。

（ＡＳＥＭアジア欧州会合）
11 月 25 日
印外務省は、ナイドゥ副大統領が、ＡＳＥＭ首脳会合における第一セッションで演説を行った旨発表した。演説では、国連安保理やその他の国際機関の改革を求め、現代の世界的な課題は、過去の課題に対応するために作られた旧来のシステムでは対応できないと述べた。また、ナイドゥ副首相はリトリート・セッションでも演説を行い、パンデミックにより現在のグローバルシステムの不足点が明らかになり、不足点の克服には、多国間の協力的なアプローチが欠かせない旨述べた。

（印露中）
11 月 26 日
ジャイシャンカル外相が議長を務め、テレビ電話方式で第 18 回中露印 3 か国外相会議が開催された。

（ＢＩＭＳＴＥＣベンガル湾多分野技術経済協力イニシアチブ）
11 月 26 日
印外務省は、シンヴィ・テロ対策局長率いるインド代表団が、25 日に開催された第 9 回テロ対策及び国際犯罪に対するＢＩＭＳＴＥＣ合同作業部会に参加した旨発表した。本会合は、ブータン主催のもと、バングラデシュ、ブータン、インド、ミャンマー、ネパール、スリランカ、タイが参加した。

4　日印関係

11 月 22 日
林芳正外務大臣は、ジャイシャンカル外務大臣と電話会談を行った。

今月の注目点：日印外相電話会談

11月22日、林芳正外務大臣は、ジャイシャンカル・インド外務大臣(H.E. Dr S. Jaishankar, External Affairs Minister of India) と電話会談を行ったところ、概要は以下のとおりです。

1　冒頭、林外務大臣から、来年日印国交樹立70周年を迎えることに触れた上で、「日印特別戦略的グローバル・パートナーシップ」を更に発展させるべくジャイシャンカル外相と緊密に連携していきたい旨述べました。ジャイシャンカル外相からは、林外務大臣の就任に対し祝意を表した上で、同様に、林外務大臣と日印関係強化のために緊密に連携していきたい旨述べました。

2　両大臣は、二国間関係につき意見交換を行い、首脳の年次往来の再開が極めて重要であり、双方の都合のよい適切なタイミングでの岸田総理大臣の訪印を実現すること、日印外務・防衛閣僚会合(「2＋2」)の日程も調整していくことを確認しました。また、両大臣は、サイバーや宇宙、経済安全保障といった新たな分野を含む幅広い安全保障面での協力に加え、気候変動対策やデジタル、ヘルスケアといった経済面での協力を進めていくこと、日印の旗艦プロジェクトである高速鉄道事業を引き続き着実に推進していくこと等を確認しました。

3　両大臣は、日印が共有する「自由で開かれたインド太平洋」の実現に向け、日印や日米豪印で緊密に連携していくことを確認しました。

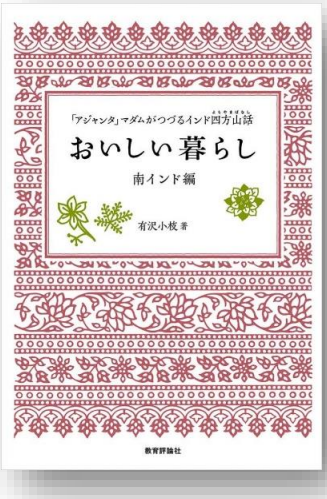
4　両大臣は、地域情勢についても意見交換を行い、その中で、両大臣は、東シナ海・南シナ海での力による一方的な現状変更の試みや経済的威圧への強い反対の意を改めて共有するとともに、サプライチェーン強靭化等の経済安全保障の面でも協力を深めていくことを確認しました。また、北朝鮮の核・ミサイル活動を含め、北朝鮮情勢についても意見交換し、林大臣から、拉致問題について理解と協力を求めました。この他、両大臣は、ミャンマーやアフガニスタン等の地域情勢、新型コロナ対策やテロ対策等の国際社会の課題での連携、軍縮・不拡散、国連安保理改革を含む国際場裡での協力等も進めていくことで一致しました。

4. 新刊書紹介
Books Review

§『おいしい暮らし 南インド編』

著者：有沢小枝　　**出版社：教育評論社**

価格：本体 1,400 円＋税　　**ISBN 978-4-86624-046-6**



東京　麹町インドレストラン「アジャンタ」のマダムが綴る、インドの食文化や生活、旅行についてのエッセイ集。北インド編に続く南インド編だ。

著者のインド各地へ旅行は、ご主人（東京生まれのインド人）のお父様がチェンナイにもご自宅があることから、個人旅行がほとんどだ。同じように旅行できるとは思えないが、いつかは行ってみたい気持ちも相まって、読むと旅行気分だ。私がイメージするインドらしからぬインドの優雅なホテル滞在や美味しそうな数々の料理の説明に気分が上がる。

「マドゥライのミーナクシ寺院」、「チェンナイの寺町マイラポール」、「インドのフランス、ポンディシェリー」、「避暑地コダイカナル」、「理想郷オーロヴィル」など、今は簡単に訪れることができない場所に、あこがれや興味がどんどん広がっていく本だ。　　（日印協会　山本真里枝）

5. イベントとお知らせ
Japan-India Events & Information

◇　最近のイベント　◇

◆　MIYABI カタックダンスアカデミー&ヌリッティア　ラクシャナ　ジャパンによる合同公演、「サンリーラ　インド古典舞踊の華麗なる響演」を観て感動！

11 月 23 日、座・高円寺２にて開催された、インド古典舞踊の華麗なる舞台を鑑賞した。

サトウ氏と山元氏合同の舞台
写真撮影　井生明氏　http://akiraio.com

北インドと南インドの古典舞踊で構成された舞台では、まず、北インドの古典舞踊(カタック）の踊り手が、タブラとサーランギの音に合わせて足首に付けた鈴を打ち鳴らし、優雅なハスタックで見せながら時折、チャッカル（旋回）の激しい動きから瞬時に静止するサム（第１拍目の音）への流れは、観客を一気にひきつける華麗な舞だった。

また、舞台途中、サトウ雅子氏がおっしゃった音遊びというテーマでの舞は、一定のターラ（拍子）に合わせたヴォイスパーカッションと舞に皆が酔いしれたのではないかと思う。

対照的に、南インドの古典舞踊（バラタナティヤム）は、フルートとムリダンガムの音色に合わせ、ラーマヤナの叙事詩を基にあらゆる細部の筋肉を表現媒体として、数々のポーズで物語った、力強い舞台だった。

山元彩子氏の顔も、表現の一部とした力強く、繊細な舞に、時を忘れて見入ってしまった。

北インドと南インドの古典舞踊芸術を合わせて堪能できた、満足度の高い充実した舞台だったと観客全員が思っただろう。もう一度、鑑賞したい舞台公演でした。　　（日印協会　井上志帆子）

◇　今後のイベント　◇

◆　2022 年 1 月 2 日より福岡アジア美術館にて「ヒンドゥーの神々の物語」展を開催

ヒンドゥーの神々といえば、どのような姿を思い浮かべるでしょうか。たとえば、破壊と創造の神シヴァ、変幻自在な神ヴィシュヌ、美しい女神ラクシュミーなど、神話と共に伝えられてきたその姿と超絶パワーは、古代から人々の熱烈な信仰を集めてきました、果たしてこうした神々のイメージは、いつ・どのようにして広がったのでしょうか。

本展は、長年にわたりインド大衆宗教図像を蒐集してきた黒田豊コレクションを核に、福岡アジア美術館、古代オリエント博物館、平山郁夫シルクロード美術館などのコレクションを加え、ヒンドゥーの神々のイメージの変遷を古代から現代までたどる展覧会です。

期間　：2022 年 1 月 2 日(日)　～ 2022 年 3 月 29 日(火)
　　9:30 - 18:00（金曜・土曜は 20:00 まで）水曜定休
会場　：福岡アジア美術館　アジアギャラリー
観覧料：一般 200 円　　高大生 150 円　中学生以下無料
主催　：福岡アジア美術館、西日本新聞社、
　　公益財団法人 福岡市文化芸術振興財団
協力　：在大阪・神戸インド総領事館
助成　：公益財団法人 花王芸術・科学財団、
　　公益財団法人 福岡文化財団
問い合わせ：福岡アジア美術館　TEL:092-263-1100

詳細は福岡アジア美術館ホームページをご覧ください

◆　2022 年 1 月 8 日(土)、9 日（日）第 25 期日本インド学生会議
「食から見据える 2030 年」–持続可能な世界のために日印ができること、一般参加者募集中

約 50 名の日印学生が身近なテーマである「食」を通して、日印の社会問題や地球規模課題について理解を深めます。「2030 年の SDGs の達成を前にどのような食に関する危機に日印が直面しているのか」互いに現状を認識した上で、イベントの最後には、6 つの分科会が「望ましい未来」に至るために必要な対策を提言します。

また有識者による講演会やゲストによる日印の文化パフォーマンスなど様々なコンテンツを通して皆様と一緒に日印の相互理解を深めます。（使用言語：英語）

開催日程：2022 年 1 月 8 日(土)/ 9 日(日)　日本時間 13:30-19:30
場所：オンライン zoom　（応募いただいた方に後日 URL を送付いたします。）
参加条件：事前申込制（無料）、どなたでもご参加いただけます。

お申し込みは下記 URL から 1 月 5 日までにお申し込みください。
https://forms.gle/qrnqUC79vrbLBzfJ9

予定されているプログラム
◆◇<1 日目>1 月 8 日(土)◇◆
13:30~14:00【開会式】
14:00~14:35【日印学生による「食」の文化交流会】
14:50~15:50【Dr. Bhattacharya, University of Hyderabad による特別講演】
16:00~17:00【農林水産省国際交渉官阿部一郎氏による特別講演】

JISC
JAPAN-INDIA STUDENT CONFERENCE

◆◇<2 日目>1 月 9 日(日)◇◆

13:30~14:00【日本側ゲストによる書道パフォーマンス】
14:00~14:30【インド側ゲストによるタブラと歌のパフォーマンス】
17:00~19:00【各分科会によるファイナルプレゼンテーション】
19:00~19:30【閉会式】

※入退場は自由です。ご関心のあるプログラムにご参加ください。
プログラムは「日本インド学生会議」のホームページをご覧ください。

主催：日本インド学生会議実行委員会
後援：インド大使館、外務省、国際交流基金、公益財団法人日印協会、
　　日本貿易振興機構（JETRO)、農林水産省
助成：双日国際交流財団、三菱 UFJ 国際財団
お問い合わせ先：japan.india.student.conference@gmail.con

◇　協会事務局からのお知らせ　◇

「インド・祭り」沖守弘写真集　会員無料配布について

「インド・祭り 神々とともに生きて 5000 年」沖守弘写真集をインド政府観光局のご厚意により、本を大事にしていただける会員様に無料でお譲りいたします。

お申込みについて 11 月 30 日にメールしましたが、ご覧になって頂きましたでしょうか？

ホームページにも掲載いたしましたので、ご希望される方は、早めにお申し込みください。
締め切りは、12 月 24 日（E メール、ファックス、電話での申し込み)、12 月末日（グーグルフォーム登録）です。

6. 掲示板　Notice

＜ 次回の『月刊インド』の発送日 ＞ 次回１月号の発送は、2022 年 1 月 21 日(金)を予定しております。

チラシの封入をお考えの方は、日程をご確認のうえ事務局までご連絡下さい。チラシを封入する際には、当該催事の協会会員に対する割引等特典の配慮をお願いしております。チラシ印刷の前にご一考下さい。また、インド関連イベントの後援も行っております。申請方法などお気軽にご連絡ください。

＜ 編集後記 ＞新型コロナの感染状況は、日本もインドも回復しつつあるが、新たなオミクロン株がインドも 12 月 3 日にカルナタカ州で発見された。インドの生活様式や医療環境から感染拡大が懸念される。この困難な状況を乗り越え、ぜひ岸田総理には、2 年途絶えている日印首脳相互訪問を実現してもらいたいところ。

今月のメイン記事は、2 本。山田真美理事には、全国に 23 あるインド工科大学 IIT のうち、2008 年に日本の援助で 11 番目に作った、ハイデラバード校 IIT-H の客員准教授の立場で、日本の産官学連携支援の様子を、そこで学ぶ学生の様子とともに生き生きと描写していただいた。世界的に、産業のデジタルトランスフォーメーション化が著しいなかで、後れを取る日本、最近とみに『ゆとり世代、そのあとのさとり世代』が社会の中心になりつつある。この日本の若者層に、刺激を与えてほしいと思う。日本という国を理解してもらってぜひ日本に来てほしい。時あたかも隣国の留学生が、日本学術振興会の科研費で得た知見を自国の軍事など国力増強に使っているとの指摘もある。この科研費は、インドの学生・研究者にこそ使ってほしいと強く思う抄子である。　寄稿いただいた記事の趣旨とかけ離れてしまったことを詫びつつ、表紙には、IIT-H の校舎・研究施設と寄宿舎の写真を掲載した。

もう 1 本は、インドベンガルールに就航エアラインの現地所長に、新型コロナウイルス感染症下で、最新の携帯電話アプリが、感染拡大抑止に大きく寄与している様子を実例とともに紹介していただいた。このアプリは、IOT 技術のお膝下ベンガルールにあるインド科学大学 IISc が開発したとされる。IIS c は世界ランキングでもトップレベルの大学で、優秀なインド人学生は IIT だけではないことを知った。この分野でも後れを取っている我が国に、ここで紹介された技術などを参考にしてほしいものである。　（編集人）

入会随時受付中

日印協会は、1903 年、長岡護美、大隈重信、渋沢栄一の３名が中心となって創設されました。以来、日印の相互理解の促進を目的として、両国の友好親善に関する事業を行ってきました。

現在の協会の活動は、当協会の活動に賛同下さる会員の皆様からの会費によって支えられております。今後もより良い活動を続けるために、当協会の活動にご賛同いただける法人･個人のご入会を歓迎致します。

インドに関心をお持ちのお知り合いの方がいらっしゃいましたら、是非日印協会をアピールして下さい。ご希望により、当協会の活動に関する諸資料をお送りいたします。日印協会の活動に賛同して頂ける多くの法人会員･個人会員のご入会をお待ちしております。

☆年会費:	個人	１口(8,000 円)から	☆入会金	個人 2,000 円
	学生	１口(4,000 円)から		学生 1,000 円
	一般法人会員	１口(100,000 円)から		法人 5,000 円
	特別法人会員	１口(150,000 円)から		(一般法人、特別法人会員共に)

月刊インド 2021年12月号（2021年12月17日発行）　　発行人 平林 博　　編集人 西本達生
発行所　公益財団法人 日印協会
〒103-0025 東京都中央区日本橋茅場町2-1-14 スズコービル2階
Tel: 03-5640-7604　　Fax: 03-5640-1576　　E-mail: partner@japan-india.com
ホームページ: https://www.japan-india.com/